

領域「言葉」と領域「表現」の連携授業についての一考察 —保育者養成校における科目間の試験的連携—

神垣 彬子¹・伊藤 智里¹・尾崎 公彦^{1,2}

A pre-study of the joint class lessons of “Expression” and “Language” in contents of early childhood care and education.

Akiko KAMIGAKI¹, Chisato ITO¹, Kimihiko OZAKI^{1,2}

Abstract : We made a “picture-story show” in the joint class lessons of “Expression” and “Language” in contents of early childhood care and education. A “picture-story show” is constructed by the picture-side (related to the “Expression”) and the story-side (related to the “Language”). Therefore, a “picture-story show” is the most suitable material to develop the comprehensive viewpoint in the scene of early childhood care and education for students. So, the purpose of this study was to find the important points for a success to joint class lessons.

As a result, we found that the teachers in charge of each class must share the significance of the joint class lessons and definitions of a “picture-story show” by holding a meeting frequently. In addition, it was necessary for a teacher to give advice for students because they cannot notice the comprehensive viewpoint in class lessons by themselves.

Key Words : contents of early childhood care and education, joint class lesson, a “picture-story show”

問題と目的

子どもは「遊び」を通して様々な経験をする。その中で、社会性や道徳性あるいは生活上に必要な知識等を獲得していく。すなわち、子どもにとって「遊び」とは生活のすべてであり、大人にとっての余暇的な意味合いをもつ遊びとは異なるものといえる。

幼稚園教育要領では、このような「遊び」を中心として構成される幼児の発達側面から5領域が設定されている。5領域とは「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」から成る保育内容であり、各々独立したものではなく、相互に関連性を持つものと考えることが適当である。平成20年3月告示の幼稚園教育要領および保育所保育指針において、5領域の関連性について次のように示されている。まず、幼稚園教育要領では、第2章「ねらい及び内容」の冒頭において『各領域に示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連を持ちながら次第に達

成に向かうものであること、内容は、幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない』とされている。保育所保育指針では『5領域並びに「生命の保持」及び「情緒の安定」にかかわる保育の内容は、子どもの生活や遊びを通して相互に関連を持ちながら、総合的に展開されるものである』とされている。

しかし、通常、保育者養成校における5領域の授業は独立した科目として開講されている。各々異なる教員が担当していることが多いため、領域間に関連性や領域をまたいだ総合的視点の重要性については、授業担当者が講義中に述べることはあっても、実際に体験する機会は少ない。ところが、白川・東(2008)は「図画工作」と領域「表現」の連携授業を通して受講学生の総合的な学習効果が高まった、としている。また、連携授業は学生にとって「表現することの意味」や「子どもにとっての表現」について各自が掘り下げて考える機会となり、「言葉」「環境」「人間関係」など他の領域と「表現」が1つの活動の中で切り離せない密接なかかわ

1 川崎医療短期大学医療保育科

2 川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科

りをもつものであることを実感できた、としている。このことから、学生が実習や就職で現場に出た際、異なる領域同士の内容を各自で統合し、総合的な視点で応用できるためには、学内指導の段階で同様の経験をしておく必要があると考えることができる。

ここで本研究では、領域「言葉」と領域「表現」の造形分野の授業が連携して紙芝居制作を行うことで、学生が領域間の関連性や領域をまたいだ総合的視点の重要性について理解することができるかどうかを検討した。

紙芝居は、大きな画面による迫力と起承転結のある大衆性のある物語に特徴があり、明るい色彩と遠見のきく絵や大胆な構図によって多少の聞き落としがあっても十分に内容を伝えることができる（八幡，2007）。すなわち、紙芝居とは、絵と物語との絶妙な調和によって独特の世界を展開するものといえる。このような性質をもつ紙芝居を制作することで、学生は、必然的に絵と物語の調和を考えることとなる。言葉によって表現された世界を造形的技術による表現に変換する活動を経験することで、学生は、各々の領域が完全に独立したものではないことを理解すると予測される。

また、これは、領域「言葉」における幼稚園教育要領及び保育所保育指針に共通する内容「絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、創造する楽しさを味わう」に通じる。保育者が子どもたちに絵本や物語の楽しさを伝えるためには、造形的表現の裏に隠された意図を読み取る力を身につけておく必要がある。以上のことから、領域「言葉」と領域「表現」の造形分野が連携して行う授業の内容は、紙芝居制作とした。

方法

研究対象者 倉敷市内のA短期大学1年生70名（男子学生2名、女子学生68名）と、領域「言葉」および領域「表現Ⅱ（造形）」担当者3名（言葉1名、表現2名）であった。いずれの科目も演習形式の授業であった。そのため、学生はAクラスとBクラスの2クラスに35名ずつ分かれて受講した。

連携授業を実施した保育者養成校では、領域「表現」の授業はⅠ～Ⅲの3講座が開講されており（表現Ⅰ：身体表現分野、表現Ⅱ：造形分野、表現Ⅲ：音楽分野）、本研究では、そのうちの表現Ⅱ（造形分野）の授業との連携授業を行った。他の表現領域科目との混乱を避けるため、

以後、領域「言葉」と連携授業を行った科目は領域「表現Ⅱ」と表記する。

研究時期 領域「言葉」および領域「表現Ⅱ」は1年次後期開講科目であったため、授業期間は平成21年10月～平成22年2月であった。そのうち、連携授業を行った期間は平成21年11月～平成22年1月であった。

手続き 平成21年2月に、領域「言葉」の授業担当者1名と領域「表現Ⅱ」の授業担当者2名の計3名が集まり、平成21年度の紙芝居制作の時期および大まかなスケジュール、シラバスを作成した、授業開始後はスケジュールに沿って連携授業を実施した（表1）。

紙芝居制作に使用する絵本については、領域「言葉」の初回の授業で、学生に3歳児から5歳児向けの絵本を1冊準備するよう伝えた。その際、絵本は領域「言葉」独自の授業内容である読み聞かせだけでなく、領域「表現Ⅱ」との連携授業における紙芝居制作にも使用する旨を伝えた。

制作スケジュールに記された各作業の内容は、以下の通りであった。

紙芝居の構成：各自で、自分で準備した絵本の内容および場面が八つ切り画用紙10枚～15枚以内に収まるよう調整する作業であり、A4用紙に、絵のコマ割りと裏書きのコマ割りを記入した。

表1 平成21年度紙芝居制作スケジュール

	水		木	
	領域「表現Ⅱ」		領域「言葉」	
平成21年1月	シラバス制作・スケジュール確認			
9月	スケジュールと教材の最終確認および発注			
10月	11月末より領域「言葉」と連携して紙芝居制作を行う旨を伝える。		各自で絵本を1冊準備するよう連絡。11月末より領域「表現Ⅱ」と連携して紙芝居制作を行う旨を伝える。	
11月			19日	紙芝居の構成
	25日	画用紙の下書き①	26日	画用紙の下書き②
12月	2日	色塗り①	3日	色塗り②
	9日	色塗り③	10日	色塗り④
	16日	色塗り⑤	17日	色塗り⑥
平成22年1月			7日	発表会①
			14日	発表会②
			21日	まとめ
2月	教員の振り返り			

画用紙の下書き：各自で、構成した内容を画用紙に写す作業。下書きの完成後に、表面の絵と裏面の文章とが合っているかどうかを、担当教員に試演して見せることによって確認した。

色塗り：各自で表面に色づけを行う。教員側からは描画材や描画法画材を指定せず、いずれも学生に自由に選んでもらった。

発表会：作成した紙芝居を、領域「言葉」の授業で学んだ読み聞かせの技術の復習を兼ねて発表した。

まとめ：領域「言葉」の授業の一環として、振り返りシートを用いた紙芝居制作についてのフィードバックを行う作業。項目は「紙芝居制作に使用した絵本のタイトル・作者・出版社・あらすじ」「制作した紙芝居の内容および用途についての考察」「紙芝居の制作過程についての考察」「言葉と表現Ⅱとが連携して授業を行ったことについての感想」「紙芝居制作全体を通

しての総合考察」で構成された。そのうち、分析に使用した項目は「言葉と表現Ⅱとが連携して授業を行ったことについての感想」「紙芝居制作全体を通しての総合考察」の2つであった。

教員の振り返り：領域担当者3名が集まり、連携授業を振り返って「良かった点」「反省点」「今後の改善点」「互いの授業に対する要望」の4項目について話し合った。

結果と考察

領域「言葉」と領域「表現Ⅱ」との連携授業における紙芝居制作を通して、学生が領域間の関連性や領域をまたいだ総合的視点の重要性を理解できたかどうかを、学生のフィードバックをもとに検討した（Ⅰ）。また、連携授業を通して、担当者が科目間で連携授業を行うことの意義を学生に伝えることができたかどうかを、

表2 「言葉と表現Ⅱとが連携して授業を行ったことについての感想」における学生のコメント内容（N=70）

	言及者数 (人)	言及者の 全体比(%)	言 及 例
領域「言葉」に関する考察	0	0.00	・言及なし。
領域「表現Ⅱ」に関する考察	64	91.43	・絵具の色づくりの方法や塗り方などの技術を学ぶことができた。 ・クレヨンやコンテ等の画材の性質や機能、その違いについて知ることができた。 ・紙芝居の絵の面に、過去、現在、未来の位置があることを学ぶことができた。 ・画用紙に絵を描く際の下書きについて学ぶことができた。
領域間の連携に関する考察	4	5.71	・物語の場面に合う表現技法や色使いについて学ぶことができた。 ・作業を通して、絵とイラストを同時に使うことで、なぜ子どもの言葉の獲得や創造力の育成に役に立つのかを理解することができた。 ・物語の内容に合った登場人物の効果的な配置や表現方法を知ることができた。 ・子どもたちの見やすい色使いや、興味を示しやすい技法について考えることができ、読み聞かせの際の絵本や紙芝居の見せ方に役立った。
その他	2	2.86	・制作時間がたくさんあってよかった。 ・友達のやっていることを参考にすることができた。

表3 「紙芝居制作全体を通しての総合考察」における学生のコメント内容（N=70）

	領域「言葉」に関する考察		領域「表現Ⅱ」に関する考察		領域間の連携に関する考察		自己の性格についての考察		その他の組合せ（「言葉」・「表現Ⅱ」・領域間の連携）	
	該当箇所 (箇所)	全体比 (%)	該当箇所 (箇所)	全体比 (%)	該当箇所 (箇所)	全体比 (%)	該当箇所 (箇所)	全体比 (%)	該当箇所 (箇所)	全体比 (%)
領域「言葉」に関する考察	1	1.43	10	14.29	4	5.71	3	4.29	—	—
領域「表現Ⅱ」に関する考察	—	—	16	22.86	3	4.29	7	10.00	—	—
領域間の連携に関する考察	—	—	—	—	5	7.14	2	2.86	—	—
自己の性格についての考察	—	—	—	—	—	—	17	24.29	—	—
その他の組合せ（「言葉」・「表現Ⅱ」・領域間の連携）	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2.86

教員のフィードバックをもとに検討した(Ⅱ)。

Ⅰ. 学生の科目間連携についての理解

振り返りシートの「言葉と表現Ⅱとが連携して授業を行ったことについての感想」と「紙芝居制作全体を通しての総合考察」の2項目について、各々の記述内容の分析を行った。それによって、学生が領域間の関連性や領域をまたいだ総合的視点の重要性をどの程度理解できたかを検討した。

言葉と表現Ⅱとが連携して授業を行ったことについての感想：学生のフィードバックを担当者3名で協議した結果、コメントの内容は、領域「言葉」に関する考察、領域「表現Ⅱ」に関する考察、領域間の連携に関する考察、その他の4つのカテゴリに分類可能であると判断した。そこで、4つのカテゴリに沿って学生のコメントを分類した。その結果、全体の90%以上が領域「表現Ⅱ」に関する考察に分類された(表2)。一方、領域「言葉」に関する考察に分類されるコメントはなく、領域間の連携に関する考察に分類されたコメントも全体の約5%と非常に少なかった。

以上より、「言葉」と「表現Ⅱ」とが連携して授業を行ったことについての感想は、ほとんどの学生が絵具の色の混ぜ方や画用紙の使い方、造形的技術の習得に関する内容にのみ言及しており、2つの科目の連携に関する考察がほとんどみられなかったことが明らかと内容にのみ言及しており、2つの科目の連携に関する考察がほとんどみられなかったことが明らかとなった。

紙芝居制作全体を通しての総合考察：フィードバックを担当者3名で協議した結果、コメントの内容は、領域「言葉」に関する考察、領域「表現Ⅱ」に関する考察、領域間の連携に関する考察、自己の性格についての考察の4つのカテゴリに分類可能であると判断した。また、この4つのカテゴリは、単独で記述されるだけではなく、他のカテゴリと組み合わせて記述される場合もあることが分かった。そこで、4つのカテゴリとそれらの組み合わせに沿って学生のコメントを分類した。その結果、最も多かったのは自己の性格のみについての考察であり、全体の約24%であった(表3)。続いて、領域「表現Ⅱ」のみに関する考察が全体の約23%であった。領域間の連携に関する考察を含んだコメントは、連携と領域「言葉」に触れたものが全体

の約6%、連携と領域「表現Ⅱ」に触れたものが約4%、連携と自己の性格について触れたものが全体の約3%、連携のみに触れたものが全体の約7%と、いずれも多くは見られなかった。

以上より、紙芝居制作全体を通しての総合考察としては、自己の性格や造形的技術について言及しており、領域間の連携に関する考察がほとんど見られなかったことが明らかとなった。

Ⅱ. 教員の連携授業の実施方法についての省察

連携授業終了後、各領域の担当者3名が集まり、それぞれの領域の視点から連携授業について「良かった点」「反省点」「改善点」「互いの授業に対する要望」の4項目について話し合い、フィードバックを行った。その結果、いずれの項目についても、3者とも言及する内容がほぼ同じであった。以下、各項目についてのフィードバックをまとめた。

「良かった点」は、じっくりと一つの絵本を観察することで絵本が醸し出す世界や作家の意図の理解が深まったこと、描画材への理解と関心が高まったこと、完成度の高い作品が出来上がったこと、であった。「反省点」は紙芝居そのものについての説明が不足していたこと、領域「言葉」の見地からの指導が薄かったこと、であった。「改善点」は、連携の意義についての指導や技術指導の範囲の棲み分けについて教員間での共通理解項目を明確にすること、紙芝居制作に適した画用紙を検討すること、であった。「互いの授業に対する要望」は、教員間での話し合いの機会を密に設けること、紙芝居と絵本の違いについて共通理解をもつこと、であった。

以上より、今回の連携授業は、進行スケジュール上では表面的に連携授業をしていたが、学生が学ぶべき内容としての領域「言葉」と領域「表現Ⅱ」との連携はなされておらず、各々の授業が独立した状態のままであったことが明らかとなった。また、その結果として、教員側からの領域間の関連性や領域をまたいだ総合的視点の重要性についての指導が不十分であったことが明らかとなった。

総合考察

本研究の目的は、領域「言葉」と領域「表現」の造形分野の授業が連携して紙芝居制作を行うことで、学生が領域間の関連性や領域をまたい

だ総合的視点の重要性について理解することができるかどうかを検討することであった。

研究の結果、今回の連携授業の実施方法では、学生に、領域間の関連性や領域をまたいだ総合的視点の重要性を伝えることは難しいということが分かった。また、今回の学生のフィードバックは領域「表現Ⅱ」に関するものが多く、領域「言葉」に関するものが極端に少ないことが分かった。しかし、全くみられなかったわけではなく、一部の学生は教員の意図する事柄を理解していた。これらの結果は、紙芝居制作に関する領域「言葉」の側面からのアプローチが不足していたことによると考えられる。今回の連携授業では、領域担当者が、互いに相手の授業で連携の意義についての指導をしているだろうという推測、あるいは、相手の授業で連携の意義についての指導をしていないかもしれないが自分の授業で言及すべきことなのだろうか、という遠慮のもとで授業を進めていた。そのため、どちらの授業でも、紙芝居制作の授業中に領域間での連携の意義についての指導を行うことができず、自発的に意義に気づいた学生以外は、理解できたかどうか曖昧な状況で連携授業を終えてしまったと推測される。

以上より、来年度は、相互の授業の役割、紙芝居の定義、連携授業で紙芝居を制作することの意義等の共通理解項目を定めるために、より密な話し合いの機会を設ける必要がある。スケジュールの立案時だけでなく、連携授業開始の直前や連携授業の実施中、実施後も話し合いの

機会を設けることによって、互いの授業での指導内容を明確に提示することができ、なおかつ必要な事柄を学生に漏れなく伝えることが可能になると考える。

また、今回の結果からは、教員側からのアプローチがなければ自分たちの行っていることに対する意義や目的を考えることができない学生が多いことも明らかとなった。しかし、そうした学生の傾向に対して教員側ばかりが歩み寄るのではなく、一定の距離を保ちつつ、学生自身が自らの意思で学習内容について考えることができるような指導や声かけを行なうことも重要であると考えられる。よって、連携授業における必要な事柄の伝え方については、今後吟味する必要があるといえる。

最後に、今年度の領域「言葉」と領域「表現Ⅱ」を受講した学生に対しては、領域「言葉」の最終回の授業において、領域間の関連性や領域をまたいだ総合的視点の重要性、科目間の連携授業で紙芝居制作を行ったことの意義や連携授業を通して気付いてほしかった点についての補足説明を行うことで、学習内容のフォローアップを行った。今年度は、初めての連携授業の試みであったため、改善点が多く見出された。しかし、領域間の関連性や領域をまたいだ総合的視点の重要性に気付いた学生が少なからずいたことで、方法の検討に示唆を与えたと思われる。来年度は、これらの改善点を担当者間で話し合い、領域担当者間でより効果的な授業の在り方をさらに検討したい。

表4 連携授業についての教員のフィードバックの内容 (N=3)

項目	省察内容 (言及者)
良かった点	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度、領域「言葉」だけで作成したときよりも完成度の高い紙芝居ができた。(言) ・1冊の絵本をじっくり観察することで、表現方法や構図についての理解が深まった。(表①・表②) ・平面表現そのものや画材についての意欲と関心が高まった。(表①・表②) ・時間をかけて取り組むことによって問題解決能力が身についた。(表②)
反省点	<ul style="list-style-type: none"> ・領域「言葉」の見地からの紙芝居について理解を深めるべきだった。(言・表①・表②) ・紙芝居の裏面が、ただ文字を写しただけに終わってしまった。(言) ・紙芝居の構造についての説明が不十分であった。(表①) ・画材の使用法や使用時の環境設定に関して説明不足だった。(表①)
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・彩色している間に画用紙が大きく反り返るので、材質の検討が必要。(言・表①・表②) ・結果的に科目単独での授業内容を圧迫したので、スケジュールの見直しが必要。(表①・表②) ・他の領域とも連携して、パネルシアター等の紙芝居以外の保育教材の制作も検討したい。(言・表②) ・実際に子どもの前で紙芝居を使用する機会を設け、作品の出来栄を体験させたい。(表②) ・事前説明を充実させたい。(表①)・彩色後の作品を乾燥させる場所の確保。(表②)
互いの授業に対する要望	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内容をもっと詰めておきたい。(言・表①・表②) ・指導担当箇所の線引きおよび共通指導項目が曖昧なので、その点を明確にしたい。(言・表①・表②) ・連携授業中の相手の授業内容や授業で指導している事柄を推測しながら自分の授業を進めてしまったので、来年度は教員間での話し合いの場を多く設けたい。(言・表①・表②)

領域担当者：言葉1名(言と表記)、表現Ⅱ2名(表①、表②と表記)

引用文献

- 保育所保育指針 2008. 平成20年3月28日 厚生労働省告示第141号.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課 2008. 保育所保育指針解説. 社団法人全国保育士養成協議会, pp.56-57.
- 文部科学省 2008. 幼稚園教育要領解説. フレーベル館, pp. 66-68.
- 白川佳子・東ゆかり 2008. 二年制保育者養成課程における「保育内容」科目の連携に関する一考察：学生アンケートと「表現Ⅱ」「図画工作Ⅱ」の連携授業の実践を中心として. 鎌倉女子大学紀要, **15**, 85-99.
- 八幡真由美 2007. 児童文化財の保育における高揚に関する一考察；領域言葉の側面から紙芝居を中心に. 上田女子短期大学紀要, **30**, 39-47.
- 幼稚園教育要領 2008. 平成20年3月28日 文部科学省告示第26号.